

ヒートポンプ冷房を用いた促成ピーマンの 作期前進化試験 — 7~8月のハウス内気温の推移 —



写真 ヒートポンプからピーマン株元へのダクト送風
(8月23日撮影)

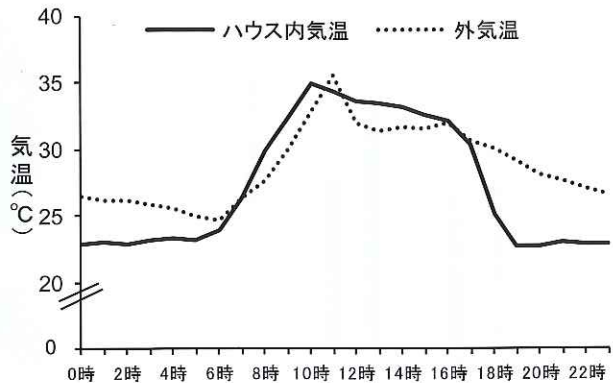


図1 高温時のハウス内気温の日変化(8月11日)

注) ヒートポンプの設定夜温 22°C、終日 50%遮光

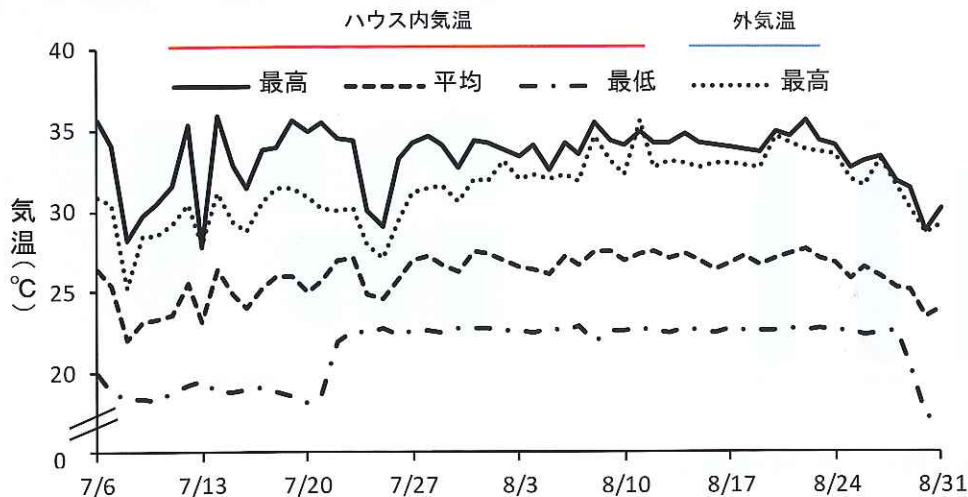


図2 7~8月のハウス内気温および外気温の推移

近年、ピーマン栽培で環境制御技術の導入が進み、収量が増加していますが、さらなる増収を目指す方法として作期の前進化が考えられます。しかし、定植から生育初期が高温期に当たるため、この時期の昇温抑制対策が課題です。そこで、ヒートポンプ冷房と遮光を用い、7月に定植する促成作型について検討しています。

試験は、品種‘みおぎ’を用いて5月23日に播種、7月5日に所内のAPハウス(1.5a、PO系フィルム被覆)に定植し、冬期のハイブリッド運転を目的として設置したヒート

ポンプシステムの冷房機能を活用した送風ダクトによる株元局所冷房(夜温19~22°C設定、写真)と、遮光はふあふあエース50(遮光率50%)の内張り展張を行いました。

この結果、ハウス内の最高気温を27.8~35.9°Cに抑えることができ、初期生育に大きな問題もなく、7月上旬定植でも栽培が可能であることが分かりました。今後は、著しく高い冷房コストに見合った収益を上げる栽培管理技術の検討が必要です。

(営農システム担当 辻哲也 088-863-4913)